

診療所だより

ストレスと病気

I ストレスについて

ストレスという言葉は日頃よく耳にします。人を含め動物は神経・ホルモン・血液等さまざまな調整機能が働き身体を正常に保っています。ところが外部または内部から色々な悪い要因が加わると調整機能に異常が生じます。その状態をストレスと言います。

表① ストレスの要因

環境要因	寒さ・暑さ・高湿
管理要因	湿って汚れた床・病原体による汚染・エサ不足・日光浴不足・延びすぎた蹄
精神的要因	離乳・空腹感・繋がれっぱなし等からくる欲求不満

動物にとって表①のようなきとがストレスの要因となります。これら一つまたは複数の要因を受け続けるとストレスが生じます。ある程度までは抵抗力が働き適応できますが、ストレスのほうに抵抗力を上回るとさまざま

まな病気を起こします。

II 子牛はどういうとき下痢症にかかるとか(ストレスと感染症)

病原体の感染によっておこる病気、なかでも白痢に代表されるような感染性下痢は多発します。子牛のいる環境が病原体(ウイルス・細菌・寄生虫)で汚染され、そのうえ湿った床・寒すぎる・暑すぎる等ストレス要因がある場合と、ない場合では発病に大きな違いがでます。(表②参照) ストレスがなければ感染しても症状は軽く、早く治ります。

子牛にとって快適な環境を保ち、よそから病原体を持ち込ま

表② ストレスと感染症

病原体がなく ストレスもない場合	○病気になる 動物にとって快適な環境
病原体があり ストレスがない場合	○感染しない ○感染しても発病しない ○感染して発病、症状は軽い
病原体があり ストレスもある場合	○感染して発病、症状が重い 動物にとって最悪の環境

ない、すでに汚染されていれば定期的に消毒することで予防できます。

III 産後なかなか発情がこない、種付きが悪いのはなぜか(ストレスと非感染症)

病原体の感染がなくても病気になります。なかでも経営を悪くするのが繁殖障害です。母牛管理がよければ(ストレスがなければ)産後40日前後には、次の繁殖のために良好な発情がきて早期に受精し、一年一産(産後80日以内に受胎)できます。しかし長期不受胎の牛が多いのが現実です。多くの要因がありますが、いちばん悪いのが産後の栄養不足です。(表③参照) 痩せてくると卵巣機能の回復が遅れ発情がこない・きても弱く種付けできないということになります。

次に大事なのが精神的要因です。卵巣・子宮は神経・ホルモンが複雑に係わり合い正常に機能します。その中枢が脳の視床下部というところにあり、脳と繁殖は密接に関係し合っているのです。外に出して(できれば他の牛と一緒に放し飼い)日光

表③ 産後母牛は何に栄養を使っているか

第1に泌乳	子育てを最優先。エサ(栄養)が不足すると身体の脂肪を乳にするためやせてくる。
第2に蓄積	泌乳に向ける以上のエサ(栄養)あれば体力の回復に向ける(脂肪の蓄積)。
最後に繁殖	泌乳・蓄積のためのエサ(栄養)が十分満たされて繁殖のための発情がくる

にあてストレスがたまらないように気分転換させてやると卵巣の働きはよくなります。産後はできるだけ外に出して、十分に観察することで、繁殖成績は良くなります。子牛の下痢症や繁殖障害に限らず他の病気もさまざまな要因がストレスになり発病します。環境・管理面からストレスになるような要因がないかどうか、いつも気をつけてやってください。